

金榮鎬著

『日韓関係と韓国の対日行動 国家の正統性と社会の「記憶」』

彩流社, 2008年

なぜ、韓国は日本にあのような「行動」をとったのか。本書は日韓関係における韓国の対日行動が、どのような特徴やパターンを持っているのか。それがいかなる要因に基づいて、変化あるいは連続しているのかを解明することで、この問いに答えようとする力のこもった作品である。本書のモチーフは、韓国の対日「政策」ではなく、あくまで対日「行動」にある。筆者は、その意図をこう説明する。韓国の対日政策は基本的に協調であったが、実際にはそれとはしばしば乖離する対立「行動」が採られてきた。ゆえに政策と行動は分けて論じる必要がある。こうした問題意識に基づき、本書は独創的な二つの観点—「国家の正統性」と韓国社会の「記憶」—から、韓国の対日行動の機制と論理を丁寧に分析した比類無き力作である。

評者が関心をもったのが、第一に「記憶」という観点である。筆者は「記憶」を日本の植民地支配の「記憶」のみならず、朝鮮戦争やベトナム戦争、光州事件といった戦争と流血の「記憶」も含む包括的な概念であり、対日行動を規定する因子として捉える。「記憶」が韓国社会でどのように再構成・再解釈され、対外認識の枠組みはいかに変化したのかに注目して対日行動を分析する本書の手法は、社会学的なアプローチから歴史研究に取り組む評者にとって大いに示唆的であった。次に興味を覚えたのは、冷戦期韓国の対日行動が、日本の植民地支配の「記憶」とどのような関係にあったかについてである。本書によれば、冷戦期韓国の国家行動は、日本の植民地支配の「記憶」よりも、北朝鮮の南侵の「記憶」と目前の軍事的脅威によって規定されていたという。特に1970

年代中盤の「反日」行動において、「過去の歴史」はあくまでレトリックであり、対北朝鮮を睨んでのものであったと指摘する。このことは、現在も日韓間に横たわる「歴史認識」問題の構造を考えるうえで、重要な手がかりとなる。

本書は韓国の対日行動を解明したエポックメイキングな作品として極めて大きな意義を持つ。とはいえ、気になる点がないわけではない。本書はKorean Security Archives (<http://www.kison.org>)で閲覧できる韓米の公文書を分析史料とする。だが2010年6月30日現在、同サイトへのアクセスは不能となっており分析史料を検証できなくなっている。むろん、これは筆者の責任ではないが、本書を読み進めるうえで、原史料を確認できないのは残念である。また、筆者も言及しているように、本書では韓国の外交文書がほとんど用いられていない。昨今、韓国での外交文書公開は本格化しており、これらを活用した画期的な研究も出されている。こうした成果を踏まえた場合、本書の議論は、どのように変化するのか、あるいは補強されるのか。この点に評者は強い興味を覚える。

以上の指摘は無いものねだりであり、本書の価値を損なうものではない。本書は、韓国の対日行動の研究者のみならず、日韓関係全般に関心のある人にとっても必読の書である。今後、外交文書を用いた対日行動研究が史料の公開状況にあわせて進められるであろう。外交文書という「史料の森」で迷わないためにも、特に当該分野の研究者には、本書を携えて、この森にわけ入ることを強くお勧めしたい。

(小林聡明 東京大学大学院)